

東京女子大学レーモンド建築 東寮・体育館を活かす会 編著
『喪われたレーモンド建築—東京女子大学東寮・体育館—』

天野 郁夫

散歩コースの一つにしている善福寺池から坂を上っていくと、東京女子大学のキャンパスの裏に出る。時には正門に廻ってキャンパスをのぞいてみる。女子大ということもあり、中に入るのは遠慮しているが、日本でも最も美しいキャンパスの一つである。それが、帝国ホテルの建築家ライトの助手として来日し、その後長く日本の建築界で活躍したレーモンドの設計によるものだと知ったのは、本誌でも以前に紹介された、木方十根『「大学町」出現』（河出ブックス、2010年）によってである。

大正後半から昭和初年にかけては、大都市郊外に鉄道が伸びるとともに、沿線開発や都市計画の一部として、高等教育機関の移転や新設が相次いだ時代だった。首都東京では、専門学校の大学昇格や関東大震災が、その契機になった。国立の東京商科大学（現一橋大学）、大岡山の東京工業大学、日吉の慶応義塾大学予科などがそれである。都心を離れた新しいキャンパスの建設には、明確な設計思想が必要とされる。大正7年に開学し、13年に建物の竣工を待って、西荻窪の地に移転してきた東京女子大学もまた、斬新なキャンパスデザインの下に出発した、郊外型の新大学の一つに他ならない。

そのキャンパスが、アメリカのカレッジ

をモデルにしたものだと教えられたのは、ごく最近になって、ここで紹介する『喪われたレーモンド建築』という、ユニークな書物によってである。キャンパスをのぞいてみるだけの私の知らなかったことだが、今は「登録有形文化財」の指定を受けているメインキャンパスの建物群の奥に、モデルに忠実に、体育館を中心に、その背後に両翼を広げた学寮を配した、学生たちのキャンパスライフの中核的なゾーンが、はじめから設計され、設置されていたのである。

このユニークな書物が編まれるに到った経緯は、そのレーモンド設計の学寮、さらには体育館の取り壊しを、大学理事会が決定したことに始まる。卒業生の一部が、メインキャンパスと一体のものとして、レーモンドの一貫した設計思想の下に作られた学寮と体育館の取り壊しに反対し、建物の保存運動に立ち上がったのである。2006年に始まったその運動は、同窓生だけでなく学内の一部教員や学生、さらには学外の建築家等の支援を受け、大学理事会との粘り強い交渉を通じて展開されるのだが、理事会側のキャンパス再開発の構想は変更されることなく、2009年の学寮・体育館の解体で終わりを告げた。本書はその運動の発端から終焉までを、中核的な担い手と

なった「東京女子大学レーモンド建築 東寮・体育館を活かす会」の10人のコアメンバーが、淡々と、しかし深い思いを込めて書き綴ったものである。巻末には、理事会とのやり取りを示す詳細な資料も収録されており、運動の全体像を知ることが出来る。

キャンパス再開発に絡む、よくある話だといってしまえばそれまでである。しかし、足掛け4年にわたるこの運動の記録にはそれだけでなく、大学に関係のある者、とくに私のような研究者にとって考えさせられる、反省を迫るさまざまな示唆を含んでいる。その、おそらくは最大のものは、大学を見る視点の問題であろう。これまで研究者が対象にしてきたのは、もっぱら制度や組織、機能、それにかかわる政策の対象としての大学であり、さもなくばそこを仕事の場としてきた教員の問題である。しかし、この本に姿を現すのは、愛校心に満ちた一群の卒業生たちである。そこで学んだものとしての大学とは何なのか。その、研究者や大学関係者が忘れ見落としてきた視点から、今の大学の在り方への鋭い問いかけを、この運動の記録は提起し、突きつけている。

この本を読むと、卒業生たちにとっての大学が、何よりも、青春の一時期を濃密な人間関係のなかで過ごした『記憶』として存在するのだということを教えられる。卒業生にとっても、やがて卒業生になる学生にとっても、大学は「共有された記憶」「記憶の共同性」のなかに存在する。そして、その記憶の共有性・共同性を呼びさすものが、キャンパスのたたずまいであり、そ

こで繰り上げられたキャンパスライフなのである。

学寮を中心とした学生のためのゾーンにまで目配りしたキャンパスは、日本には殆んど存在しなかった。東京女子大のアメリカ・モデルのキャンパスは、その意味で例外的な存在であり、取り壊しの対象となった学寮と体育館は、卒業生たちにとってシンボリックな意味を持った、キャンパスライフにかかわる記憶の最も重要な、解発装置であった。それが、大学理事会の一方的な決定によって「喪われた」ことが、卒業生たちの失望と怒りを噴出させたのである。

大学は、理事会や、いまそこに生活する教職員・学生だけのものではない。大学は、それをはるかに上回る数の卒業生たちの記憶のなかに存在し、有形・無形に支えられている。最近、ホームカミングデーなど、卒業生との絆の形成と強化に努力する大学が増えているのは、大学がそのことに気づき始めたことの表れといってよい。しかし、そうした卒業生の記憶の中の大学は、どこまで大切にされているのだろうか。

かつてのキャンパスライフの思い出を一瞬にして解発させるキャンパスのたたずまいと、それを構成する建造物群の重要性—卒業生たちに物的な支援を期待する前に、そうした「記憶の共同性」に大学が深く思いを致すことの重要性を、この運動の記録は教えている。

(東京大学名誉教授/教育社会学・高等教育論)

[工作舎 2,520円]